

ムラクモキジビキガイ、多摩川河口で2年ぶりに採捕

令和7年2月5日に行った多摩川河口での貝桁網調査で、ムラクモキジビキガイ (*Japanacteon nipponensis*) が2年ぶりに採捕されました(図1、2)。当協会では、平成31年2月22日(トピック No.46)と令和5年2月8日(トピック No.70)にも同じく多摩川河口で、令和6年3月24日には三枚洲で本種を採捕しており、今回が4例目となります。

今回採捕された個体は、殻高7.9mm、殻幅3.9mm(図2: No.1)、殻高5.8mm、殻幅3.5mm(図2: No.2)の2個体です。令和5年に採捕された12個体(平均殻高9.8mm、平均殻幅4.6mm)に比べると2個体とも半分程度の大きさで、まだ成長過程にある小型の個体でした。これまで採捕したムラクモキジビキガイはいずれも2月と3月に採捕されており、この時期にどこから移動してくるのか、大変興味深いところです。

国立科学博物館※によれば本種は、「近年の環境の変化により、東京湾など多くの産地で姿を消し、現在は瀬戸内海などに細々と生き残っている状況です。」とあります。今回の採捕は、幻の貝となっていたムラクモキジビキガイが多摩川河口に定着しつつあることを示すものと思われます。



図1 採捕地点



図2 採捕されたムラクモキジビキガイ
(左: No.1、右: No.2)

※: 研究室コラム 2017年6月19日 国立科学博物館

<https://www.kahaku.go.jp/column/index.php?month=201704>